

まえがき

日本の近代化はどのようにして達成されたか。一般的な認識としては、一八五三年にアメリカ東インド艦隊司令長官であるペリー Matthew Calbraith Perry が四隻の蒸気軍艦を率いて日本にやってきて開国を求めたことにより、日本は二〇〇年以上にわたる鎖国の状態を脱して国際関係の中に入っていく、その後は、外国通商の是非をめぐる尊王攘夷運動や条約勅許問題をめぐって激しい内乱が引き続き、武士の政権である徳川幕府も倒されていく。そして天皇を中心とする明治の新しい体制が成立し、その明治政府の下で推進された「文明開化」政策によって日本の近代化、すなわち社会の西洋化と資本主義的な経済発展が実現されたのである、と。

しかしながら、このような認識は誤っていないにしても、まったく不十分な理解であると言わざるを得ない。なぜなら、政府の推進する近代化政策によって国が近代化するのであるならば、世界中に近代国家は遙か昔から満ちあふれていることであろうから。

だが一九世紀のアジアと世界の情勢は過酷であり隷属的であるというのが現実であった。アジアの諸国は、その多くが欧米列強の植民地や保護国となっていた。インドはイギリスの、インドネシアはオランダの、ヴェトナム・ラオス・カンボジアはフランスの、フィリピンはアメリカの、シベリアと中央アジアはロシアの、それぞれ植民地ないし保護国となっていた。

大国である中国とオスマン・トルコは、アヘン戦争やクリミア戦争などを通して英・仏・露などによって蚕食され、半植民地化の途を歩みつつあった。アジア以外の世界の諸地域についても、その大半が欧米諸国の植民地と化しているというのが現実であった。

すなわち一九世紀の世界を見渡したとき、欧米諸国以外で国家の独立を堅持したうえで近代化（議会・憲法制度、社会的近代化、資本主義経済の発展）を実現できていたのは日本を除いては見あたらないという姿が浮かんでくる。

このような状況を目にするとき、日本の近代化が明治政府の「文明開化」政策によってなされたというだけでは説明不可であることが諒解されることであろう。この問題を突き詰めて考えるならば、明治の日本ではなく、欧米列強と最初に接触し、一連の国際条約を締結したときの日本、すなわち武士（侍）が統治を担っていた徳川幕藩体制下の日本の国家的力量に着目せざるを得なくなるであろう。

徳川日本の社会はどのようにして、そのような力量を備えるに至ったのか。本書はこれを研究テーマとする、国際日本文化研究センターにおける共同研究の成果報告論集である。研究代表笠谷の主宰した前回共同研究「一八世紀日本の文化状況と国際環境」（思文閣出版から同名の成果報告論集が公刊）では、徳川日本の一八世紀に焦点をあわせて、徳川社会に胎胚していた新しい文化的動向を広範な分野にわたって総合的に解明し、多くの成果をあげることができた。

今回の共同研究会においては対象をより拡大して、一七世紀から一九世紀にわたる時代の徳川社会全般を取り扱い、如上の問題、日本の近代化にとって徳川社会はどのような力 power を、どのようにして形成しえていたのか、これを多分野の研究者とともに総合的に究明する。

さて社会の近代化をめぐる論ぜられた書物というのは汗牛充棟ただならずの状態であり、しかも「近代化」という概念をめぐるも、果てしない広がりを持っている。資本主義的経営と工場制労働によって規定される経済的近代化、市民革命と市民社会の形成および憲法と国民議会の制度による政治的近代化、合理的思惟と個我の確立そして表現の自由をもってする思想的近代化、共同体からの脱却と人と情報の自由な移動を指標とする社会

的近代化、等々。

また「近代化」の類縁概念としても、合理性、西洋化、国際化と植民地化、資本主義、工業化、情報化、デモクラシー、個人主義、市民社会、経済社会、科学技術と科学的思考等々を列記することが出来るであろう。これら「近代化」の定義や概念規定をめぐって実に夥しい数の研究がなされ、膨大な量の書物が出版されてきた。

このような研究状況の下にあって、なお近代化を論じる本書の立場について述べておきたい。近代化の概念規定をめぐる議論の重要性は否定するものではないが、しかしながらヒストリアンが中心となって構成された本共同研究会では、各分野における実態面ないし事実関係の究明に、より多くのエネルギーと時間をかけるべきであるという点で意見の一致を見た。

そして各研究分野において新規の事象ないし新しいトレンドと覚しき感触、直観を得たならば、関係事象を網羅的に探索―列挙し、それら諸事象を通貫し、共通に内在する核心的な問題を把握していくという姿勢をとることで諒解しあった。一七―一九世紀の徳川社会の各分野において見出される趨勢、これまで知られていなかった新しい事象、動向に注目し、それらの事象の意味と、歴史の展開に対して果たしている意義を解明していくこと。そしてそれらがその後の明治日本の歴史形成に対して及ぼしている影響関係について考察した。

日本の近代化の起源を徳川社会に求める議論はこれまでも少なからずあった。古く日本資本主義論争において、いわゆる労農派は明治維新をブルジョア革命とみなす見地から徳川社会の中に胚胎する近代的要素に着目した。対する講座派では、その異端とされた服部之総がマニユファクチャー論争を提起して、徳川社会を資本主義発達におけるマニユファクチャー段階と規定するなど、社会の発展的側面に焦点を合わせる研究がなされた。

戦後の歴史学会では一九七〇年代に入ると、アメリカの日本研究者を中心として日本の近代化に関する研究が

進められ、それらの成果はジョン・W・ホール、マリウス・B・ジャンセン編／宮本又次、新保博監訳『徳川社会と近代化』（ミネルヴァ書房、一九七三年）といった形で日本にも紹介され、また日本側研究者によっても大石慎三郎、中根千枝らを代表とした『江戸時代と近代化』（筑摩書房、一九八六年）が著され、さらに速水融のグループの進める歴史人口学的研究が加わるなどによって、徳川社会の近代的発展に関する研究がいつそう盛んとなった。われわれの前掲、共同研究会成果報告書である『一八世紀日本の文化状況と国際環境』も、そのようなものの一つであった。

今回の論集では、前述したように、一七世紀初頭から一九世紀の半ばにわたる徳川時代の日本社会の状況と、それが日本の近代化にとって有した意義の解明を研究主題としている。徳川社会における近代化要因の生成と発展を、より長期にわたるパースペクティブの下に捉えていこうとする試みである。研究の専門細分化が一段と進行している現代の研究状況からしたときには、このような広すぎる対象域の設定は逸脱であると見なされるかも知れない。

しかし研究の現状がそういうものであればこそ、それに抗してトータルな歴史認識というものに挑戦すること、も一つの意義を有するのではないかと考える。敢えてこのような大きなテーマを設定した所以である。

二〇一五年二月

編 者

序論 徳川時代通史要綱…………… 笠谷和比古 3

Ⅰ 政治

新井白石と「政治」…………… 大川 真 91

徳川吉宗の武芸上覧…………… 横山輝樹 113

一九世紀の藩政情報——諸藩見聞録の分析…………… 磯田道史 137

会津戊辰戦争の戦後処理問題をめぐる一考察…………… 岩下哲典 159

——松平容保家族の処遇を中心に——

Ⅱ 思想

長州藩明倫館の藩校教育の展開…………… 前田 勉 179

日本儒学における考証学的伝統と原典批判…………… 竹村英二 209

——G・B・ウィーコ、A・ヴェクタらのフィロロギー、
そして清代考証学との比較のなかで——

本多利明の北方開発政策論——『蝦夷拾遺』を中心として…………… 宮田 純 235

幕末から明治、後期水戸学「影」の具現者……………	上村敏文	267
——久米幹文を中心として——		

Ⅲ 文 化

藩校における楽の実践——弘前藩校稽古館を例として……………	武内恵美子	301
大武鑑「大名付」と板元と大名家——江戸出版の仕組み……………	藤實久美子	335
宝永地震と近松の浄瑠璃——『心中重井筒』の場合……………	原 道生	365
『道の幸』『諸国風俗問状答』からみた松平定信の文化政策の背景……………	森田登代子	383
東北農村における結婚パターンの変容……………	平井晶子	407
——一八・一九世紀の歴史人口学的分析——		
一九世紀における剣術の展開とその社会的意味……………	魚住孝至	425

Ⅳ 科 学

中根元圭と三角法……………	小林龍彦	457
高松松平家博物図譜の成立——一八世紀博物図譜の模索——……………	松岡明子	479
蘭書による西洋天文学の受容の始まり……………	和田光俊	501
——『ラランデ暦書』の入手・翻訳をめぐる——		

江戸後期幕府・諸藩の近代化努力と大砲技術……………郡司 健 523

Ⅴ 国 際

オランダ商館長と将軍謁見——野望、威信、挫折……………フレデリック・クレインス 551

一七〇一—一九世紀における日本の朝鮮史認識形成の特色……………平木 實 579

清朝考証字の再考のために……………伊東貴之 609

——中国・清代における『尚書』をめぐる文献批判とその位相、
あるいは、伝統と近代、日本との比較の視点から——

兼葭堂が紡ぎ、金正喜が結んだ夢——東アジア文人社会の成立……………高橋博巳 625

幕末最終章の外交儀礼……………佐野真由子 647

神戸開港に臨んだ外国奉行柴田剛中……………菅 良樹 681

——大坂町奉行・兵庫奉行兼帯期の動向——

共同研究会開催一覧
執筆者紹介

序論 徳川時代通史要綱

笠谷和比古

はじめに——本書の課題——

本書の序論にあたる本論では、徳川時代の通史の叙述を試みる。ここでは政治史を基本としながらも社会・経済・文化の各領域の問題にも論及する。それは本論集に収録された個々の研究論文の成果を正当に位置づけるという課題に基づくものであるが、単に徳川時代の通史的叙述を施すだけでなく、それが日本の近代化にとって、どのような意義を有していたかという問題の解明に取り組むことを主要なテーマとしている。

従来、徳川時代の政治・社会のしくみである幕藩体制を研究することと、日本の近代化の前提条件として徳川時代の政治・社会を研究することとの間には少なからぬ断絶があった。具体的には戦国期から徳川時代の前期を対象とする研究と、一八世紀以降の中後期を対象とする研究との間に横たわる深い海溝の如きものであった。今回の論集では対象時期を一七世紀から一九世紀にかけてと設定することによって、おのずから右の両時期をカバーするわけであるが、同時に右に述べた研究史上の断裂の克服をも試みている。

しかしながら限られた紙数の中でこのような課題を充足することには困難ともなう。本論では、あくまで筆

者の独自の見解を中心にして、本書の主題にとって必須不可欠と判断した事柄の叙述に努めた。既往の研究史の全体に対して、バランスの取れた配慮に欠けていることについては諸賢の御寛恕を請う次第である。

第一章 一七世紀の徳川社会——幕藩体制の形成と展開——

一 関ヶ原合戦と徳川幕藩体制の形成——近世の国制構造を規定した関ヶ原合戦——

いわゆる幕藩体制の初発をなすのは慶長五（一六〇〇）年の関ヶ原合戦であり、それに続く同八年の徳川幕府の開設であるというのは大方の一致した認識といってよいであろう。しかしながら、それらの内実、それらがその後展開する政治体制を規定したあり方については、従来認識を大きく改めなければならないことが次第に明らかとなってきた。

従来、関ヶ原合戦の意義をめぐっては、徳川家康の率いる東軍が同合戦で勝利をおさめたことから、その後展開する二六〇年余にわたる徳川幕府の全国統治にとって盤石の基礎を築いたものという評価が一般的であったが、近年の研究はこの認識に対して根本的な疑義を呈するものとなっている。

図1は関ヶ原合戦後における大名領地の全国的分布を示したものである。ここでは便宜的に一〇万石以上の大名を掲げているが、これによって全体的傾向を知ることができるであろう。名前の頭に黒四角の印のある者は徳川にとって外様となる大名、白丸を付したのは譜代大名、二重丸印は徳川の一門（家門、親藩）大名である。

一目して瞭然であるが、この領地配置図が示していることは外様大名の圧倒的な多さであり、徳川系大名の領地の少なさである。徳川系大名の領地は、東北は陸奥岩城平の鳥居忠政の一〇万石あたりが限りをなし、それより関八州は徳川領分。それから一〇万石以下の中小の大名であるために名前は出していないが東海道筋はすべて

国際日本文化研究センター共同研究
「徳川社会と日本の近代化」17〜19世紀における日本の文化状況と国際環境― ◆共同研究会開催一覧

研究代表 笠谷和比古
研究幹事 佐野真由子

〔二〇一一年度〕

▼第一回

四月九日(土)

17〜19世紀日本をめぐる研究課題とその意義

―共同研究会の趣旨説明―

共同研究会運営方針の検討 I

四月一〇日(日)

共同研究会運営方針の検討 II

▼第二回

六月四日(土)

オランダ人による踏絵の真偽

―第一次史料に基づく再検討―

19世紀日本の読書と政治

六月五日(日)

近世武士の刀と剣術修行

幕末の尾張藩主徳川慶勝と写真

▼第三回

八月二一日(日)

笠谷和比古

全 員

全 員

F・クレインス

前田 勉

魚住孝至

岩下哲典

▼第四回

一〇月二二日(土)

本多利明の経済政策思想

藩領における植生の復元と山林利用

―近世津軽領を中心に―

一〇月二三日(日)

森幸安の地図の継承について

日本における西洋天文学の受容と改暦

―寛政の改暦について―

物領番入制度、その成立と意義

―吉宗期の武芸奨励と関連して―

忍濃(浄土宗)・独湛(黄檗宗)流派の形成 加藤 善朗

和式大砲技術と近代化 郡司 健

―外在的近代化と内在的近代化― 平木 實

朝鮮時代後期の身分制度 藤實久美子

―奴婢制論議を中心に―

江戸文化と木版刊行物 藤實久美子

―作成工房から流通・読者の諸相まで―

宮田 純

長谷川成一

辻垣晃一

和田光俊

横山輝樹

▼第五回

二月一日(土)

東北農村における家の変容

平井晶子

勝海舟の中国認識をめぐって

劉 岳兵

二月一日(日)

徳川時代における高齢者の健康管理について

——香月牛山著『老人必用養草』に見る——

横谷 一子

米国総領事ハリスの將軍拝謁と「対食」問題をめぐって

佐野真由子

大坂定番就任者の基礎的考察

菅 良樹

▼第六回

二月四日(土)

18世紀における楽思想の展開

武内恵美子

京の文人―皆川淇園を中心に―

高橋博巳

二月五日(日)

儒学／漢学と明治初期の知識人

竹村英二

明清交替と東アジア世界

伊東貴之

―清朝の王権理論と朝鮮・日本におけるプロト・

ナシヨナリズムの生成―

芳賀 徹

十八世紀京都の詩と絵画

(二〇二二年度)

▼第七回

四月二十七日(金)

「辻蘭室文書」の基礎調査

益満まを

―辻蘭室の交友関係を中心に―

河竹黙阿弥の描いた開化期の日本

原 道生

四月二十八日(土)

中根元圭研究(1)

小林龍彦

―元圭の生涯の前半を中心に―

大坂「大阪」経済の展開

脇田 修

18世紀における楽思想の展開

武内恵美子

▼第八回

六月二二日(金)

逆賊から帝大総長へ

瀧井一博

―初代総長渡辺洪基の生涯と思想―

19世紀の藩校教育

前田 勉

六月二三日(土)

高松松平家伝来博物図譜について

松岡明子

『おくのほそ道』から終焉へ

魚住孝至

キリシタン時代に関する一考察

滝澤修身

▼第九回

八月二四日(金)

17～19世紀における文物交流による朝鮮・日本両国の

歴史理解の側面

本多利明再考

宮田 純

八月二五日(土)

天明二年刊、作者不詳『二休和尚奇行物語』について

横谷 一子

19世紀の藩政情報

——諸藩見聞録の分析——

磯田道史

稲荷信仰の淵源と近世における展開

上村敏文

▼第一〇回

一〇月二六日(金)

草場佩川の見た外国

高橋博巳

蕪村の文人画と春信の浮世絵

早川聞多

——上方と江戸、雅と俗——

一〇月二七日(土)

森幸安地図の体系化に向けて

辻垣晃一

外庄と土と町人

岩下哲典

▼第一一回

二月七日(金)

『隔蓑記』に見られる明正院御所の庭

W・カウテルト

幕末の琉球の日記

下郡 剛

——異国船来航記事をめぐって——

二月八日(土)

江戸後期の幕府・諸般における西洋兵学の受容と大砲

技術——江川英龍の活動を中心として—— 郡司 健

『ラランデ天文書』による西洋天文学の受容

和田光俊

近世日本の王権論——新井白石の場合——

大川 真

▼第一二回

二月一五日(金)

筒井政憲と高島秋帆

18世紀における仏画作成過程について

佐野真由子 加藤善朗

——六角堂能満院の粉本集成を資料として——

二月一六日(土)

地方への眼差しと知のネットワーク

森田登代子

——屋代弘賢『諸国風俗問状答』から——

外国奉行柴田剛中による神戸開港

菅 良樹

太宰春台の楽思想

武内恵美子

(二〇一三年度)

▼第一三回

四月二六日(金)

本年度研究会の方針

笠谷和比古

——幕藩制社会の時代区分論——

近世大坂の歴史的流れ

脇田 修

四月二七日(土)

『槐記』にみる18世紀初期の文化様相

小林善帆

徳川幕府享保改革における武芸奨励の意義

横山輝樹

ポサドニック号事件と勝海舟

上垣外憲一

▼第一四回

六月二八日(金)

オランダ商館日記にみる日蘭関係の実情

——ワーヘナールの江戸参府日記を中心に——

F・クレインス

江戸前期の学校構想

前田 勉

六月二十九日(土)

徳川政権における坊主衆―医者・同朋・茶道―の成立

股座真実子

江戸幕府と中根元圭

小林龍彦

近世文学上の諸問題

宮崎修多

▼第一五回

八月二三日(金)

秋田蘭画について

芳賀 徹

自然支配の理念と近代科学

松山 壽一

―F・ベーコンとデカルト―

八月二四日(土)

会津戊辰戦争の戦後処理問題

岩下 哲典

―松平容保家族の処遇を中心に―

幕末の転封―19世紀の国際環境の下で―

谷口 昭

武鑑編集の情報源

藤實久美子

▼第一六回

一〇月二五日(金)

『道の幸』から『諸国風俗問状答』へ

森田登代子

―屋代弘賢の著述物―

幕末の転封―19世紀の国際環境の下で―

谷口 昭

一〇月二六日(土)

西洋天文学の受容と改暦

和田 光俊

宝永地震と大坂劇壇

原 道生

藩の情報収集

磯田 道史

▼第一七回

一二月六日(金)

17〜19世紀日本における朝鮮国史認識と檀君論の展開

平木 實

徳川政権の合法化論

大川 真

一二月七日(土)

積奠と楽

武内恵美子

近世日本における家族観の変容…宗門人別改帳の分析

より
平井晶子

明治維新の宗教政策

上村敏文

―水戸学、久米寛文を中心に―

▼第一八回

二月一四日(金)

日本人の先祖崇拜とキリシタン

滝澤修己

兼葭雅集図の行方

高橋博巳

二月一五日(土)

森幸安の地理認識

辻垣晃一

幕末の外交儀礼

佐野真由子

成果報告論集の作成方針

全員討議

三月二日(日)・三日(月)

成果報告論集作成検討会 合宿・松風園(愛知県蒲郡市)

執筆者紹介（収録順、*は編者）

*笠谷和比古（かさや かずひこ）

1949年生。京都大学大学院文学研究科博士課程修了(国史学)。国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学教授。

『近世武家社会の政治構造』（吉川弘文館、1993年）、『近世武家文書の研究』（法政大学出版局、1998年）、『江戸御留守居役』（吉川弘文館、2000年）、『関ヶ原合戦と近世の国制』（思文閣出版、2000年）、『武家政治の源流と展開』（清文堂出版、2013年）、『武士道——侍社会の文化と倫理——』（NTT出版、2014年）。

大川 真（おおかわ まこと）

1974年生。東北大学大学院文学研究科博士課程後期修了(日本思想史)。博士(文学)。吉野作造記念館館長、尚絅学院大学・山形県立米沢女子短期大学非常勤講師。

『近世王権論と「正名」の転回史』（御茶の水書房、2012年）、「古典を読む 読史余論」（『岩波講座 日本の思想』3、2014年）、「吉野作造の「民本主義」再考——吉野の考える民衆の政治参加とは——」（『FORUM OPINION』23号、2013年）。

横山輝樹（よこやま てるき）

1980年生。総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻博士後期課程修了。博士(学術)。近鉄文化サロン講師

「惣領番入制度、その成立と意義——吉宗期の武芸奨励と関連して——」（『日本研究』45号、2012年）、「惣領番入制度と五番方——吉宗期の事例を中心に——」（『日本研究』46号、2012年）、「徳川吉宗の小金原鹿狩——勢力運用の観点から——」（『日本研究』50号、2014年）。

磯田道史（いそだ みちふみ）

1970年生。慶應義塾大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(史学)。静岡文化芸術大学文化政策学部教授。

『近世大名家臣団の社会構造』（東京大学出版、2003年）、『武士の家計簿』（新潮社、2003年）、『無私の日本人』（文藝春秋、2012年）。

岩下哲典（いわした てつりのり）

1962年生。青山学院大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。博士(歴史学)。明海大学ホスピタリティ・ツーリズム学部教授(大学院応用言語学研究科教授兼任)。

『江戸の海外情報ネットワーク』（吉川弘文館、2006年）、『改訂増補版 幕末日本の情報活動——「開国」の情報史——』（雄山閣出版、2008年）、『大槻磐溪編「金海奇観」と一九世紀の日本——「金海奇観」とその世界——』（雄松堂書店、2014年）。

前田 勉（まえだ つとむ）

1956年生。東北大学大学院文学研究科博士後期課程修了。愛知教育大学教育学部教授。博士(文学)。

『兵学と朱子学・蘭学・国学』（平凡社選書、2006年）、『江戸後期の思想空間』（ぺりかん社、2009年）、『江戸の読書会』（平凡社選書、2012年）。

竹村 英二 (たけむら えいじ)

1962年生。ロンドン大学東洋アフリカ研究院大学院修了。オックスフォード大学 SCR メンバー。国士舘大学21世紀アジア学部教授・東京大学東洋文化研究所研究協力員。

『幕末武士／士族の思想と行為——武人性と儒学の相性的素養とその転回——』（御茶の水書房、2008年）、*The perception of work in Tokugawa Japan: A study of Ishida Baigan and Ninomiya Sontoku* (UPA, Lanham, Oxford, 1997)、「元～清の『尚書』研究と十八世紀日本儒者の『尚書』原典批判——中井履軒『七經離題畧(書)』、同収「離題附言(書)」を題材に——」（東京大学『東洋文化研究所紀要』第167冊、2015年3月）。

宮田 純 (みやた じゅん)

1971年生。同志社大学大学院経済学研究科経済政策専攻博士後期課程修了。関東学院大学兼任講師。博士(経済学、同志社大学)。

「本多利明の経済思想——享和元年成立『長器論』を中心として——」（『日本経済思想史研究』9号、2009年）、「本多利明の経済思想——寛政7年成立『自然治道之弁』の総合的研究——」（『Asia Japan Journal』5号、2010年）、「本多利明の対外交易論——1798年成立『経済秘策』を中心として——」（『Asia Japan Journal』7号、2012年）。

上村 敏文 (うえむら としふみ)

1959年生。筑波大学大学院地域研究科日本研究コース修了。ルーテル学院大学総合人間学部准教授。

『多様性と対話』（共著、キリスト教視聴覚センター、1998年）、「タンザニアの教会形成と文化変容——ルーテル教会を中心に——」（『日本の神学』46号、日本基督教学会、2007年）、「日本の近代化とプロテスタンティズム』（共編著、教文館、2013年）。

武内恵美子 (たけのうち えみこ)

総合研究大学院大学文化科学研究科修了(日本文化研究・音楽学)。京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター准教授。

『歌舞伎囃子方の楽師論的研究——近世上方を中心として——』（和泉書院、2006年）、「『楽家録』をめぐる文化環境」（神野藤昭夫・多忠輝監修『越境する雅楽文化』書肆フローラ、2009年）。

藤實久美子 (ふじぎね くみこ)

学習院大学大学院人文科学研究科史学専攻博士後期課程単位取得後退学。ノートルダム清心女子大学文学部現代社会学科准教授。博士(史学)。

『近世書籍文化論——史科学的アプローチ——』（吉川弘文館、2006年）、「江戸の武家名鑑——武鑑と出版競争——」（吉川弘文館、2008年）、「近世公家名鑑編年集成』全26巻(共編、終風舎、2009～2014年)。

原 道生 (はら みちお)

1936年生。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退(単位取得)、明治大学名誉教授。

『近松門左衛門(新潮古典文学アルバム)』（新潮社、1991年）、「近松浄瑠璃の作劇法』（八木書店、2013年）、「古典にみる日本人の生と死——いのちへの旅——』（共著、笠間書院、2013年）。

森田登代子 (もりた とよこ)

武庫川女子大学家政学研究科博士後期課程修了(家政学博士)。NPO 法人ピースポット・ワンフォー

副理事長.

『近世商家の儀礼と贈答』(岩田書院, 2001年), 『遊楽としての近世天皇即位式——庶民が見物した皇室儀式の世界——』(ミネルヴァ書房, 2015年), 『大嘗会再興と庶民の意識』(『一八世紀日本の文化状況と国際環境』思文閣出版, 2011年).

平井 晶子 (ひらい しょうこ)

総合研究大学院大学博士課程単位取得退学. 博士(学術). 神戸大学大学院人文学研究科准教授.
『日本の家族とライフコース』(ミネルヴァ書房, 2008年), 『変容する直系家族——東北日本とピレネーの場合——』(『歴史人口学と比較家族史』ミネルヴァ書房, 2009年), 『東北日本における家の歴史人口学的分析——一八・一九世紀の人口変動に着目して——』(『一八世紀日本の文化状況と国際環境』思文閣出版, 2011年).

魚住 孝至 (うおずみ たかし)

1953年生. 東京大学大学院人文学研究科博士課程修了. 博士(文学). 放送大学教授.
『宮本武蔵——日本人の道——』(ベリかん社, 2002年), 『宮本武蔵——「兵法の道」を生きる——』(岩波新書, 2008年), 『芭蕉 最後の一句』(筑摩選書, 2011年), 『諸家評定——戦国武士の「武士道」——』(編著, 新人物往來社, 2007年).

小林 龍彦 (こばやし たつひこ)

1947年生. 法政大学第二文学部卒業. 前橋工科大学名誉教授. 四日市大学関孝和数学研究所研究員. 学位博士(学術).
『和算家の生涯と業績』(共著, 多賀出版, 1985年), 『幕末の偉大なる数学者——その生涯と業績——』(共著, 多賀出版, 1989年), 『関孝和論序説』(共著, 岩波書店, 2008年).

松岡 明子 (まつおか あきこ)

1972年生. 九州大学文学部美学美術史科卒業. 香川県立ミュージアム専門学芸員. 香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課主任.
『日本の博物図譜 十九世紀から現代まで』(国立科学博物館編, 東海大学出版会, 2001年), 『絵師三木文柳考』(『香川史学』29号, 2002年), 『高松松平家の植物図譜——『衆芳画譜』と『写生画帖』——』(『高松松平家博物図譜 写生画帖 雑木』香川県立ミュージアム, 2014年).

和田 光俊 (わだ みつとし)

1960年生. 神戸大学大学院理学研究科修士課程修了. 国立研究開発法人科学技術振興機構職員.
『東京帝国大学神道研究室旧蔵書 目録および解説』(共著, 東京堂出版, 1996年), 『渋川春海年譜』(共著, 『神道宗教』184・185号, 2002年), 『享保期における改暦の試みと西洋天文学の導入』(笠谷和比古編『一八世紀日本の文化状況と国際環境』思文閣出版, 2011年).

郡司 健 (ぐんじ たけし)

1947年生. 兵庫県立神戸商科大学大学院経営学研究科修士課程修了. 大阪学院大学経営学部・大学院商学研究科教授. 経営学博士.
『連結会計制度論——ドイツ連結会計報告の国際化対応——』(中央経済社, 2000年), 『海を渡った長州砲——ロンドンの大砲, 萩に帰る——』(シリーズ萩ものがたり19, 萩市, 2008年), 『享保期の異国船対策と長州藩における大砲技術の継承——江戸中期の大砲施術の展開——』(笠谷和比古編『一

八世紀日本の文化状況と国際環境』思文閣出版, 2011年).

Frederik Cryns (クレインス, フレデリック)

1970年ベルギー生. 京都大学人間・環境学博士課程修了. 人間・環境学博士(京都大学). 国際日本文化研究センター研究部准教授.

『杏雨書屋洋書目録』(共著, (財)武田科学振興財団, 2006年), 『江戸時代における機械論的身体観の受容』(臨川書店, 2006年), 『十七世紀のオランダ人が見た日本』(臨川書店, 2010年).

平木 實(ひらき まこと)

1938年生. ソウル大学校大学院史学科国史学専攻博士課程修了. 文学博士(韓国ソウル大学校).

元天理大学教授. 京都府立大学共同研究員・京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター共同研究員・奈良県立医科大学非常勤講師.

『朝鮮社会文化史研究』(国書刊行会, 1987年), 『朝鮮社会文化史研究Ⅱ』(阿吡社, 2001年), 『韓国・朝鮮社会文化史と東アジア』(学術出版会, 2011年).

伊東 貴之(いとう たかゆき)

1962年生. 東京大学大学院人文科学研究科中国哲学専攻学位取得修了. 国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学教授.

『思想としての中国近世』(東京大学出版会, 2005年), 『中国という視座』(共著, 平凡社, 1995年), 『中国近世思想の典範』(著書の翻訳, 楊際開訳・徐興慶校閲, 台湾大学出版中心, 2015年刊行予定).

高橋 博巳(たかはし ひろみ)

東北大学大学院博士課程単位取得退学. 金城学院大学文学部教授. 博士(文学).

『京都藝苑のネットワーク』(べりかん社, 1988年) 『江戸のバロック』(べりかん社, 1991年) 『画家の旅, 詩人の夢』(べりかん社, 2005年).

佐野真由子(さの まゆこ)

1969年生. ケンブリッジ大学修士(MPhil)課程修了(国際関係論専攻). 国際日本文化研究センター准教授.

『オールコックの江戸——初代英国公使が見た幕末日本——』(中央公論新社, 2003年), 「幕臣筒井政憲における徳川の外交——米国総領事出府問題への対応を中心に——」(『日本研究』39集, 2009年), 「坂本龍馬と開明派幕臣の系譜——受け継がれた徳川の教養——」(岩下哲典・小美濃清明編『龍馬の世界認識』藤原書店, 2010年).

菅 良樹(すが よしき)

兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究所社会系教育講座博士後期課程修了. 博士(学術). 淳心学院中・高等学校教諭.

『近世京都・大坂の幕府支配機構——所司代 城代 定番 町奉行——』(清文堂出版, 2014年), 「嘉永・安政期の大阪城代土屋寅直と城代公用人久保要」(宮地正人監修『幕末動乱——開国から攘夷へ——』土浦市立博物館等四館共同企画展図録, 2014年), 「幕末・維新时期における畿内近国譜代小藩の権力構造——播磨国山崎藩本多家の事例——」(『城郭研究室年報』23号, 2014年).

とくがわしゃかい にほん きんだい か
徳川社会と日本の近代化

2015(平成27)年3月25日発行

定価：本体9,800円(税別)

編者 笠谷和比古

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-751-1781(代表)

装幀 井上二三夫

印刷 亜細亜印刷株式会社